東　北　巡　検　（浅海先生）

７月９～１１日

東京では暑い日が続いていた頃，私たちは東北巡検に出かけた。７月とは言っても東北は寒かった。その上雨まで降り出して，予定に多少の変更が生じ，今回の巡検は八郎潟巡検といっても差しつかえないものになった。

さて，秋田駅前に朝８時４０分頃に集合後，八郎潟新農村建設事業団本所のマイクロバスで，私たちは八郎潟の中央干拓地の大潟村へと向かった。バスは一面の緑の中を走る。緑なんて東京では見られないし，また張りつめた快い空気も東京では味わえない。

車窓からは延長約５２kmの周辺堤防・籾の貯蔵庫カントリーエレベーター・昭和４８年４月に開学された県立農業短大・水位調節用の機場などが見えた。この八郎潟の干拓計画には江戸時代末から案が出されていたが，決定的なものがないまま昭和３１年まで至った。ところが昭和３１年最終的な事業計画を完成し，翌３２年に着手した。干拓面積１７,２０３ha，うち農地が１１,９０９ha総事業費２９７億円という大がかりなものであった。それゆえ入植希望者に対しては試験が実施され，慎重な審査がなされる。その結果選ばれた入植者は１年間の訓練を経て営農を開始する。現在では第４次まで４６０戸の農家が入植し，１戸当り１５haをトラクターや大型コンバインなどの共同利用によって耕作している。

そのため，稲作に要する時間は１０a当り約３５～５０時間であり，農家の主婦は農閑期になると公民館に集まり，料理・手芸・詩吟などの講習をうけて余暇を有効に利用しているようである。ところでこの干拓地では一面が緑となる単調さを避けるために，入植次によって家屋の屋根の色が異なっている。第１次は赤と橙，２次は黄，３次はピンク，４次は青という具合である。これを公民館の屋上から眺めれば，ちょっとした「ガリバー」の気分を味わえるだろう。本当にカラフルな村だった。

こうして私たちは事業団の方に説明していただきながら八郎潟干拓地を見学したが，実際の干拓地は規模や生活様式などすべての点で，初めの想像をはるかに越えるもので，驚くばかりであった。それと同時に，これだけのものを考え，作りだした人間の知恵にも驚かざるを得なかった。この巡検で得たものを今後の授業，さらには卒論などにも役立てたいものである。（２年　山川敦子）